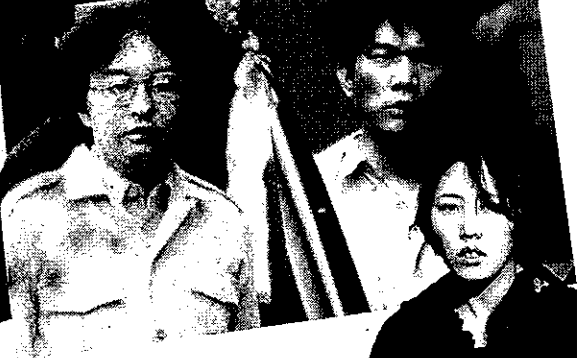


〈冷静な判断力を感じる〉
〈犯人なりに考え、最適と
思われる行動を取ったので
はないか〉(5月11日付産経
新聞)
まだ記憶に新しい大桃珠
生ちゃん(?)の遺体を線路
に遺棄した新潟女児殺害事
件。その際、「彼」は犯人像
をこう分析してみた。ま
た昨年11月、神奈川県座
間市で起きた前代未聞の「9
人殺し」の白石隆浩につい
ては、

〈被害者を自宅に誘い出し
たのは、自分の欲望を解放
できる場所がそこしかな
かったからではないか〉(2
017年11月6日付産経新
聞)
と、解説してもいる。犯
罪者の心理を分析する「第
一人者」とでも言うべき存
在、長谷川博一氏(59)。こ
れまで長谷川氏は、刑事事
件の「暗部」を見つめ、数
々の凶悪犯と面会を重ねて
きた。

「私が施されたカウンセリング」

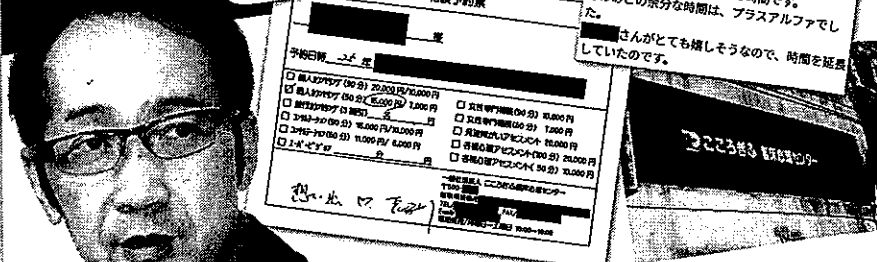


長谷川氏が面会した凶悪犯

宮崎勤、宅間守、島山鈴
香……。
いずれ劣らぬ残忍な事件
を起こした当事者に会い
彼らの「心の闇」を分析し
てきたのである。
東海学院大学の元教授で、
昨年9月まで臨床心理士で
もあった彼はカウンセラー
としても活躍し、作家の柳
美里氏、女優の東ちづる氏
といった著名人のカウンセ
リングも行い、斯界でその
名を轟かせてきた。
現在も、岐阜県にあり、
自身がセクター長を務める
「こころぎふ臨床心理セン
ター」(以下こころぎふ、あ
るいはセンター)でカウ
ンセリングを続け、テレビ番
組にも出演するなど、第一
線に立ち続けている大家
だ。
そんな長谷川氏のカウ
ンセリングを受けたいと、各
地から「こころぎふ」にク
ライエント(心理相談の来
談者)が足を運んでいると
いう。その道の「プロ中の
プロ」である彼はどんな
「テクニク」を用いてカ
ウンセリングを行っている

のか。いやが上にも関心が
高まるどころだが、
「一体、長谷川さんとのカ
ウンセリングは何だったの
か。腹立たしくて許せませ
ん。私は彼と肉体関係を持
ちました」
こう衝撃の告白を始める
のは、「こころぎふ」に通い、
長谷川氏のカウンセリング
を受けてきた佐々木奈々子
さん(31)「仮名」だ。
「彼とは2回、「最後」まで
しました。抱き合ったり、
キスしたり、身体を舐めた
りという性的関係で言えば、
回数はずっと増えます。そ
の結果、私の症状は改善す
るところか、悪化していき
ました。あの人はどうい
うつもりで私を受け入れたの
か。彼は最悪です」
佐々木さんが憎悪の形相
で続ける。
為政者が我田に水を引く、官僚が公文書を
改竄する、医者が患者を傷付ける。これらを
世間では背信、あるいは背徳行為と言う。職
業倫理上、「絶対にやってはいけないこと」だ
からだ。以下は、カウンセリング界の権威に
してスターである男性に関する「破戒」の話。

「私が施されたカウンセリング」



長谷川氏のメール(右)と「♡」マーク付き予約票

果、クライエントがカウ
ンセラーに不信任などの負の
感情を向けることを陰性転
移と言います。信頼や尊敬や愛
情といった感情を向けるこ
とを陽性転移と言います。
陽性転移が生じるのは決し
て珍しいことではありません
。だからと言って、クラ
イエントと性的な関係にな
るのは、職業倫理上あって
はならないことです」
佐々木さんが回顧を続け
る。
「私自身、恋愛転移してい
る自覚を持っていましたが、

その気持ちも、「先生(長谷
川氏)としたい」とストレ
ートに伝えました。16年の
夏のことです」
前記の通り、クライエ
ントがこうした感情を抱くの
はよくあることだが、無論、
カウンセラーがそれに応え
てはならない。事実、「一般
社団法人 日本臨床心理士
会」の倫理綱領第3条には
こう明記されている。
「私が気持ちを抱えたとこ
ろ、彼はその後、「前に言っ
ていた佐々木さんの気持ち
は変わらない?」とか、「自
分(長谷川氏)とどうい
うことがしたいの?」とか、
「キスだったら軽いものか
らディープなものになって
いくの?」とか、彼との性
的行為を私に想像させるよ
うなことを尋ねてきました。
そして、「もっと自分に甘え
てくるように」敬語ではな
く、くだけたタメ口で」と
言った上で、彼が私の自宅
に来る訪問カウンセリング
が始まることになりまし

繰り返された「関係」

「当時の夫との関係が上手
くいってないところがあり、
私が「こころぎふ」に通い
始めたのは3年ほど前。そ
れ以前に、私は彼の本を何
冊も読んでいて、この人だ
つたら信用できるんじゃない
かと考えたんです」
以後、彼女は長谷川氏に
よるカウンセリングを月1
回程度の頻度で受け、次第
に彼女はカウンセラーであ
る長谷川氏に「好意」を抱
くようになる。
心理カウンセラーの衣川
竜也氏が解説する。
「カウンセラーは、カウ
ンセリングにおいてクライエ
ントとコミュニケーション
をとるなかで、普通の人間
関係では話さないことを聞
き出します。クライエント
はカウンセラーに感情を投
影するようになり、その結

宮崎勤 宅間守を分析した
臨床心理学の権威に裏の顔!



宅間との面会に向かう長谷川氏

「ブレイ」は続いた。「そして、「次は口」と言う」と、彼は「軽くにしておこ」と言いながらやはり2回、私の口にキスをしました。さらに私が下半身を触ってほしいと求めると、「どこを触ってほしいの？自分（佐々木さん）の手で持っていて」と、彼の手を私が誘うように言いました。その後の訪問カウンセリングもそんな感じで、翌年10月の4回目の訪問カウンセリングだったと思いますが、彼と最後まで交わりませんでした。最初は私が上で、後で彼に上になってもいい、彼は気にしていませんが、私がビールを飲んでいいるから大丈夫だと伝えると、避妊せずに果てていました（同）

ものが認められていないからだ。佐々木さんが振り返って続けた。「その2カ月後だったと記憶しています。彼と2度目のコトに及びました。覚えていたのは途中で彼が萎えて自らを奮い立たせていたことです。やはり彼は最後まで避妊しませんでした。その後、今年の3月だったと思いますが、その時は、私が彼に口でしました」

「2度目に最後までした後、彼が帰ってから全身に蕁麻疹が出て、私は気も狂わんばかりの痒さに見舞われました。私から求めたのは事実です。でも、終わった後に虚しさというか、寂しさというか、ものすごいストレスに襲われてしまうんです（同）

「最後に彼は、私としたことを、奈々子さんを助けてあげたが、とにかく私の情緒不安定がひどくなり、彼のことをひどく責めるようになってしまいました。でも、その時はまだ彼のことを信じていた。私のためを思って、私が良くなるためにしてくれたのだと。しかし今年の夏、思い余って東京の山脇由貴子さんという

女性のカウンセラールに彼とそして改めて確認しておくとして、クライエントがカウンセラールに抱く愛情などの感情は、本質的にはカウンセラールに向けられたものではなく、あくまで、それまでの人生で得られなかった感情をカウンセラールに投影しているに過ぎません。したがって、本来の恋愛対象ではないカウンセラールと性的関係を持つことで、クライエントは後悔し、罪悪感を抱き、ストレスレベルが上がってしまった。症状が悪化するのには当然です」

「激しく後悔しています」

「治ると思いい、信頼して彼に付いていきました。でも、彼と一緒に泊まるたびに辛くなって……。今では、彼に弄ばれ、コントロールされていんだと悔しくて堪りません。私も長谷川さんと肉体的関係を持ちました。涙ながらにこう訴えるのは、佐々木さん同様、長谷川氏のカウンセラールを受けてきた小笠原喜美恵さん（44）仮名だ。

カウンセリングルームではなく外で会うことを勧めてきた。センタールのスタッフには内緒なので見られないようにと、離れた場所のホテルに泊まって出張カウンセリングをするようになりました。自分はもう性欲がないので何も心配しなくていいとも言われました」

「鬱状態だった私が「こころぎふ」に通い始めたのは13年のことでした。カウンセリングのなかで彼は、私が受けた幼少期の虐待が関係しているの、その私の中の幼子を満たすために、

カウンセリングは、最終的に彼女をどん底へと突き落とす。最初の出張カウンセリングは14年の1月頃だったと記憶しています。泊まったのは京都のホテルグランヴィアでした。夕方に京都駅の切符売り場で待ち合わせ、

チェックインした後、カラオケに行ったりしてからホテルに戻り、ランプなんかをして一緒にベッドで彼と寝ました。そして、「大人の喜美恵さんも受け入れてあげる」、「肩が凝ってるね」と言いつつ肩を揉まれ、胸も触ってきました。その時は、それで終わりました（同）

以降は佐々木さんと同じような展開が待っていた。「彼はこういうことをしているのは私とだけだと言っていましたし、出張カウンセリングに感じない」と彼は何か辛そうな顔をする。私自身、出張カウンセリング自体は楽しかったし、彼のことを信頼していたので……。先生を受け入れる覚悟を決め、2回目の出張カウンセリングの時、枕のところにコンドームを隠しておきました。万が一、妊娠するのは怖かったので。そして4回目の出張カウンセリングの時だったと思います。やはり京都のホテルで彼と肉体的関係を持ちました。それ以後の出張カウンセリ

ンゲでも、私が口でしてあげたり、彼が私の下半身をまさぐったり。でも、どこかでカウンセラールとこういう関係になつてはいけないと思っていた部分もあり、実際、彼とそういうことが終わった後、虚しさというか、寂しさというか、辛くなるばかりで……。同）

「最後は今年の5月。その時も彼に口でしてあげましたが、翌日、何となく私以外ともこういうことをしているのではないかと感じ、やんわりと尋ねると、彼に「詮索するな」と怒鳴られました。結局、彼のところにカウンセラールに行つて、私の心の傷は広がってしまったと感じています。どうして彼のところに通ってしまったのか、今、激しく後悔しています（同）

「彼の言い分は信じられません。性被害などのトラウマはその直後が一番ひどい。それなのに約40年間フラッシュバックや解離は起きなかったのでしょうか。彼は結婚して子どもがいるのですが、その間、どうしていたのでしょうか。それに解離とは、一般社会で言えば会議の内容を全部すっぽり忘れてしまうようなもので仕事にならない。カウンセラールを続けるべきではありません。早くご自身の治療に専念されたほうがいいと思います。彼の言っていることが本当なのだとすれば」

フラッシュバック!?

複数の女性クライエントが証言した、生々しい「背徳セックス・カウンセラール」。さて、当の長谷川氏は何と答えるか。

「二人の主観は歪んでいる」としつつ、まず佐々木さんと肉体的関係については「奈々子さんからの強引な性的要求に遭い、彼自身が10代の頃に受けたと主張する性被害の）フラッシュバックが起きて、わけわからなくなっていました。最中のことは覚えていない。訪

問カウンセラールは彼女からの脅迫（佐々木さんが長谷川氏を責めたこと）をなだめるために行きました。しかし、彼はかつて佐々木さんに対してこう認めている。

「複数回目的性的行為について冷静に踏ん張って、それはダメだよって言わなかったことこの責任。ごめんささい」

「覚えているのであれば、謝ることもできないはずなのだが……。なおこの長谷

川氏の発言は「証拠」が残っている。続いて、小笠原さんとの肉体的関係を尋ねると、またしても、「フラッシュバックが起きていたかもしれないと認めた」ということ。同）

「彼が言ったのは信じられません。性被害などのトラウマはその直後が一番ひどい。それなのに約40年間フラッシュバックや解離は起きなかったのでしょうか。彼は結婚して子どもがいるのですが、その間、どうしていたのでしょうか。それに解離とは、一般社会で言えば会議の内容を全部すっぽり忘れてしまうようなもので仕事にならない。カウンセラールを続けるべきではありません。早くご自身の治療に専念されたほうがいいと思います。彼の言っていることが本当なのだとすれば」

臨床心理学の権威、長谷川博一氏。彼は「床」に「臨」み、一体何を積み重ねてきたのだろうか――。